

一般人な僕は 冒険者な親友について行く

Ippanjin na Boku wa
Boukensha na Omoide ni Tsuite Yuku

3

著 ひまり



たなか だいち
田中 大地

イースティン聖王国に
召喚された勇者。どこか
スレているが、気のいい青年。

グレイス

魔法都市デウニッツの
落ち人専属のギルド職員で、
日本からの転生者。

シルビア・アルデリート

アルデリート魔王国の女王。
勇者も惚れるほどの絶世の美人。

くせ ゆりあ
楠瀬 優梨愛

聖たちのクラスメイトで、
イースティン聖王国に
召喚された聖女。

さとう はるき
佐藤 春樹

聖の幼馴染で親友。職業は「守護者」。
かなりのオタク脳で、
聖を困惑させることもしばしば。

にっ た ひり
新田 聖

ある日突然、異世界に迷い込んだ存在である
「落ち人」となった高校生。
職業は冒険者にならない「主夫」。

主な登場人物紹介

CHARACTERS

1章 さあ、空を飛ばう

ごく普通の高校生、新田聖^{にらたひかり}は、ある日突然、親友の佐藤春樹^{さとうはるき}と一緒に異世界に迷い込んでしまった。

チートスという町の冒険者ギルドに辿り着いた二人は、異世界からやって来た人間が「落ち人」と呼ばれていることなどを教えられ、職業判定をすることになる。

その結果、春樹が戦闘職の『守護者^{しゅごしや}』だった一方で、聖は非戦闘職の『主夫』だと判明。冒険者になれないので、春樹の『付き人』となることになった。

異世界を楽しむために旅をすることに決めた二人は、ダンジョンのドロップ品で一儲けしたり、魔物を美味しく調理したり、いろいろとやらかしながら、魔法都市デウニッツに到着する。

そこで人々が常^{ほうき}で空を飛ばぶ光景を目の当たりにした二人は、転生者の少女、グレイスの協力のもと、ハイエルフであるヘイゼンの指導を受けて、空飛ば魔法の習得を目指すことになったのだった。

空飛ば魔法を使用するのに必要な免許を取得するには、口頭試験と実技試験に合格する必要がある。

その口頭試験の参考書をヘイゼンに渡されてから五日後。

通い慣れたヘイゼンの部屋で、聖と春樹は息をついていた。

あれだけ無理だと頭を抱えていた口頭試験は、実にあっさりとクリアした。

試験は一对五での面接形式。試験に精一杯で、自己紹介された面接官の名前すらも覚えていない有様だが、それは仕方がないことだろう。

だが、何はともあれ合格だ。

となれば、待ちに待った空飛ぶ魔法の訓練に移ることができる。

そうワクワクする二人だったが、聖はどうしても気になったことがあったため、ヘイゼンに聞いてみた。

「そういえば師匠^{ししょう}、本当のところドラゴンってどうなんですか？」

「どう、とは？」

「なんか参考書には、『空で会ったら叩き落とせ』って書いてあるじゃないですか。ドラゴンの性格と違って、どうなのかな、と」

攻撃的だったら一目散に逃げるし、大人しいのなら敵対しないように静かに遠ざかる。

いくら常識だと言われようと、叩き落とすなんて真似をするつもりはなかった……というか、無理だ。

聖がそんな気持ちを込めて見ると、ヘイゼンはふむと頷く^{うなづ}。

「……そうだな、基本的にドラゴンは知能が高く、人の言葉も自在に操る。それに、老齢なドラゴンはこちらを尊重してくれるから、普通にしている限り攻撃してくることはない」

「そうなんですね、よかった」

それなら奇跡的にドラゴンに遭遇^{そうぐう}しても大丈夫だろうと聖が胸を撫^なで下ろす一方で、春樹は怪訝^{けげん}そうにする。

「……じゃあ、老齢じゃない若輩^{じやくはい}のドラゴンは、どうなんだ？」

ヘイゼンが語ったのは、あくまでも老齢なドラゴンのこと。老齢、とはどの程度を指すのか不明だが、そうではないドラゴンの方が多いのではと思った春樹はそう尋ねた。

「そうだな、老齢と呼ばれるほどのドラゴンは数が少ない」

「え、じゃあほとんど若輩^{じやくはい}ってことですか？」

驚く聖に、ヘイゼンが頷く。

「ああ。空で遭遇するのは、礼儀のなっていない若輩者の方が多い」

「……ちなみに、その礼儀のなっていないドラゴンと遭遇したら、どうするんだ？」

その質問に、ヘイゼンは何でもないようにあっさりと答えた。

「もちろん叩き落とせ。あれはただでかいだけのトカゲだ」

「……」

「ああ、叩き落とすのが無理なら、丸焼きでもいいな」

淡々と語るヘイゼンには、冗談の気配は微塵もない。

しかし丸焼きにする方が難しいんじゃないか、いや、もしかしてドラゴンに恨みでもあるんだろうか、と思いつつも、なにやら落ち人が関わっていきそうなので、聖と春樹は口を噤む。

だが、次のヘイゼンの一言でいろいろ吹き飛んだ。

「それとドラゴンが美味い。多少危険があつたとしても、機会があるなら倒す価値はある」

「美味しいんだ……」

「マジか！」

この瞬間、聖と春樹の中のドラゴンが、危険な魔物から超高級な美味しい食材へとジョブチェンジした。

なにせヘイゼンは、食事を抜いても気にしない人物である。その彼がそれほど美味しいと言うのなら、どれだけ美味しいのかと気にならないわけがない。

「師匠！　すぐに空飛ぶ訓練をしましょう！」

「マスターしてドラゴンに遭わなきゃいけないからな！」

すべては美味しい食材を獲るために！　と、気合十分で告げた二人だが、ヘイゼンはそれらをまるっと無視した。

「今日は無理だ」

「どうしてですか!？」

「なんでだ!？」

「仕方がないだろう、ヒジリはともかくハルキ、お前の箒がない」

「あ」

そういえばそうだったと思い至った二人は声を上げる。

このデウニツツにやってくる途中に立ち寄ったクヒト村で手に入れたマジック箒は、話し合いの結果聖が使うことになっていて、春樹は箒を持っていない。

これから空飛ぶ訓練をしようのに、その必須道具がなければできはるはずがなかった。

「えっと、どこで買ったらいですか？」

「買う、といってもな。さすがにマジック箒のようなものはないぞ」

聖の言葉に、ヘイゼンは首を横に振る。

「……師匠の箒は何でできてるんですか？」

「僕のはドラゴンから作られた、特別なものだ。これも売ってないな」

「ドラゴン……」

それはひょっとして、遭遇して叩き落とされたか丸焼きにされたかしたドラゴンですかとは聞けない。思わず微妙な表情を浮かべた聖を余所に、ヘイゼンは続ける。

「一般的には魔力を通しやすい木を加工したものを使い、魔力量が成長するのに合わせて取り換えていくんだが……ハルキの場合は無理だな」

ヘイゼンはそこで言葉を一度切った。

「魔力の成長がほぼ止まっていれば問題ないが、ハルキはこれからが成長期本番だ。それに落ち人の成長速度を考えても、一般的なものとは到底使えない」

「あの、ちなみにマジック箒は……」

「それはどれだけ化け物じみた成長をしようと問題ない。だからこそ最高級の箒と呼ばれ、ここでは誰もがこぞって手に入れようとするものだ」

断言するヘイゼンに、聖はそんなすごい箒なのかと驚き、春樹は少しだけ羨ましそうな顔になる。

「じゃあ、俺はどうしたらいいんだ？」

「そうだな……作ってみるか」

「は？」

驚く聖と春樹を気にすることなく、ヘイゼンは部屋の隅で何かを探し始める。

「作るって……木を切ったりヤスリかけたりするところから、とか？」

「いや、流石にそれはちょっと……」

「だよね……」

作る、という意味がよくわからないまま、二人はヘイゼンをじつと見る。

やがて探していたものが見つかったのか、ヘイゼンはポーチを手に二人のもとに戻ってきた。

「とりあえず奥に行く」

促され、いつも訓練で使っている部屋へと向かう。

そこでヘイゼンがポーチから取り出したのは、土といくつかの魔石。それを眺めていると、ヘイゼンは聖に視線を向けた。

「……やはり、ヒジリが適任か。ヒジリ、これを全部砂に変えろ」

「え？」

砂に、と言われた聖はキョトンとするも、すぐに初日に宝玉が割れた時の現象を思い出す。

「えっと、この魔石に容量以上の魔力を入れればいいってこと、ですよね？」

「そうだ」

「わかりました」

床に座った聖は、言われた通り全力で魔力を流していく。

途中何度か魔力切れになったが、程なく全部砂に変えることができた。

それを確認したヘイゼンは土と砂を混ぜ、そして何かの水を適量振りかけてから、再び聖を呼ぶ。

「さてヒジリ。次はお前の土魔法で、これを箒にしろ」

「はい？」

さすがに聞き返した。

確かに聖の土魔法は、土を望んだ形に変えることができるが、土は土であり箒にはならない。

困惑する聖だが、ヘイゼンに「いいからやれ」と言われ、よくわからないながらも箒をイメージ

しながら土に魔力を流し込んでいく。

「……できました」

そして出来上がったのは、やはり箒の形をしたただの土の塊。かたまり

これをいったいどうするのだろうかと思味深げに見る聖と春樹の前で、ヘイゼンは金色の粉のようなものを土の塊に振りかけた。次の瞬間――

「――っ！」

光を放ち、収まった後そこにあったのは、まごうことなき箒だった。

全体が白磁はくじで覆つるわれており、ヘイゼンの箒のように金色の蔓つるのようなものが描かれている。頭に高級な、とつくが間違はなく箒だ。

「え？　なんで？」

「すっげーっ！　師匠の箒もこうやって作ったのか？」

「ああ。マジック箒には劣るが、魔石でできている分、一般に流通されているものよりは遥はるかに高性能だ……まあ、普通は魔石を砂に変えるのに手間も時間もかかるため、この方法をとる者はいないがな」

「……なるほど」

春樹が納得したように頷く。

魔力切れになってもすぐ回復するという、非常識な体質の聖がいるからこそできる手法だった。

「ありがとう聖！　さすが主人公属性！　さすが非常識すぎる能力！」

「……いや、まあ、この場合はよかったんだけど……なんだろう、素直に喜べない」

非常識扱いにも若干慣れてきてしまった聖だが、それはそれであり、これはこれであつた。

「師匠、これで春樹の箒は完成ってことでいいんですか？」

「そうだな。ああ、あとヒジリ。マジック箒を見せろ」

「あ、はい」

渡すと、ヘイゼンはすつと目を細める。

まだ聖や春樹には見ることでできない、魔力の流れを確認して、ヘイゼンはふつと息を吐いた。

「……さすがマジック箒、魔力の流れにブレがない」

感心したようにそう言つて、聖に箒を返却する。

「明日までに、それぞれ箒に魔力を目いっぱい流せ」

「……魔力切れとか気にしないで、ですか？」

「そうだな、ヒジリはそれでいい。ハルキは回復薬を飲みながら、明日に影響しない程度にして
おけ」

聖とは違い、春樹は魔力切れの際に強い脱力感に襲われる。それを考慮こうりょした上でのヘイゼンの言葉だった。

「了解」

「わかりました」

二人は頷くと、その日はそのまま寝泊まりしている部屋のある冒険者ギルドへと戻った。

部屋に着いたのは日が暮れる前。そのため、魔力を流す時間はたっぷりある——そう思ったのが間違いだった。

「さあ、やるか！」

「うん！」

もうすぐ飛べると、箒の前にテンションが上がってしまった二人。

聖は何度魔力切れを起こしてもやめず、春樹は春樹で魔力回復薬片手に、ひたすら魔力を流しまくった。

二人の様子を見に来たグレイスが若干引いていたが、二人は全く気にせず流し続けたのだった。

——その結果。

「で、こうなったと？」

「えっと、そうです」

「あー、ちょっと流しすぎた、のか？ いや、でもこれって……」

二人はヘイゼンから目を逸らし、それぞれ手に持った箒を見下ろす。

昨日作成した春樹の箒は、鑑定かんていのスキルである【主夫の目】で見ていると、【ミラクル箒】とい

うなんとも可愛らしい名前だった。どこの魔女つ娘むすめの箒だろう、と思ったのは記憶に新しい。

そんなミラクル箒と、聖が持っていたマジック箒だが、魔力を流しているうちになぜか突然名前が変わった……いや、聖の脳内アナウンスによると、正確には『進化』したらしい。

まず、ミラクル箒の詳細はこうだ。

【親友の箒（元ミラクル箒）】

親友の親友による親友のための、なんかすごい箒。

これで飛んでこそ真の親友といえるだろう。

聖も春樹も、意味がわからなかった。

親友という文字がゲシュタルト崩壊して、親友ってなんだっけ？ と二人は本気で考えた。

ヘイゼンが頭を抱えたのも、もっともである。

そして、聖のマジック箒はこうなった。

【主夫の箒（元マジック箒）】

主夫たる者、箒を自在に扱えてこそ一人前である。

空くらい飛んでみせろ、主夫なんだから。

なぜこんなにも挑発的になっているのだろうか。やはり意味がわからない。

そしてなにより、主夫のなんちゃらシリーズが箒にまで及んだことに、そのうち身に着けるものすべてがそうなるのではという嫌な予感がして、聖は頭を抱えた。

一方で、春樹から箒の現状を聞き終えたヘイゼンは、もはや恒例となった諦め^{あきら}め^めの表情を浮かべていた。

「つまり、原因はヒジリだな」

「たぶんな」

「断定された!? いや、ちょ」

さすがに春樹の箒に関しては春樹の責任だろう、と言おうとした聖だが、すぐに土台に魔力を流したのは自分だったと思に至る。

「あれ？ ひよっとして僕が作ったから、こうなったんですか？」

「そうだな。ヒジリが作った箒にハルキが魔力を流したことによって完成した、ということだろう。原理はわからんが」

「聖の魔力がなんか特殊なんだな、きっと」

「うわあい……」

聖は思わず窓の外を見た。

確かにマジック箒は聖の魔力を流したことによって変化した。マジック箒とミラクル箒に共通しているのは、聖が魔力を流したということだけ。

ひよっとしたら他に要因があるのかもしれないが、現時点ではこれが最有力だった。というかおそらくこれしかない。

「……魔力の流れが変わったな」

そんな箒をじっと見ていたヘイゼンの言葉に、聖が慌てて聞き返す。

「え？ なにかおかしいですか？」

「いや、逆だ。恐ろしいほど均一に、淀みなく魔力が流れている。特にハルキの箒は、マジック箒に匹敵するほど精度が上がっている」

そう言われ、春樹は目を見開く。

「え、マジか……そういや、名前が変わってから、魔力を流しやすくなったような……」

「そうなの？ 僕は特に変わらないけど」

「ヒジリの箒もより高性能になっではいるがな。おそらく元から魔力を通しやすいから気づいていないだけだ」

ヘイゼンの言う通り、聖にその変化はよくわからなかった。

「……しかし、ヒジリの魔力で変わるのか……」

ヘイゼンが何かを考えるように眉根^{まゆね}を寄せ、ぽつりと呟^{つぶや}いた。それを聞きとった聖は念のためと

口を開く。

「……師匠の箒に魔力は流しませんよ」

「なぜだ」

即答で返ってきた疑問に、聖は真面目な表情で答える。

「……名前が【師匠の箒】とかに変わったらどうするんですか」

ヘイゼンの答えは沈黙だった。

なにせ春樹の箒が【親友の箒】になったのだ、ヘイゼンの箒が空気を読んで【師匠の箒】になる可能性は十分にありえる。

そんな聖の懸念が通じたのか、ヘイゼンは静かに頷いた。

「そうだな。今はやめておこう」

「よかつ……今は？」

「ああ、昨日で材料を使い切ったからな」

全く通じていなかった。

だが聖としても正直なところ、土台を自分が作って、そのあとヘイゼンが魔力を流したらどうなるのか、若干興味があるのもまた事実だった。

「えっと、機会があれば……」

「わかった」

ヘイゼンが無表情で頷く様子に、聖は「あ、これはすぐ材料が揃う」と直感する。

何かに没頭すればするほど無表情になるのが、師匠であるヘイゼンという人物だ。きつと材料調達の算段を立てているのだろう彼に、けれどそれはとりあえず横に置いておいてほしいので声をかける。

「それはともかく師匠。箒も揃ったので、実技を教えてください」

「あ？ ああ、そうだな」

「場所はいつもの部屋でいいのか？」

「……まあ、最初はいいだろう」

そう言っただけ移動すると、ヘイゼンは床に手について何かを囁く。

その途端、床や壁が一瞬ぐにやりと歪んだように見え、聖は速攻で具合が悪くなる。

「……ぐ、なに？」

「……？ なんか床が軟らかいような？」

「今、この部屋のすべてを軟化させた。これで壁にぶつかろうが上から落ちようが、危険はないはずだ……ところでヒジリ、何をしている？」

訝しげなヘイゼンの声、だが聖は答えられない。代わりに春樹が苦笑しつつ口を開く。

「あー、レモの実を食べてる」

「なぜだ？」

「部屋の歪みで酔った」

「……酔う？」

その程度で具合が悪くなるのか、と言われたように聖は感じたが、実際のところ、ヘイゼンの感想は『よくそんなものを食べるな』だった。

「……あー、治った。師匠続けてください」

「……そうか。では、始める」

若干涙目のまま続きを促す聖。その様子に、レモの実はショック療法的なものか……と察したヘイゼンは、何も言わず頷いたのだった。

結論から言うと、空飛ぶ魔法は難しかった。

常に箒に魔力を流し循環させつつ、イメージと共にその魔力を飛ぶ力へと変換させる。

それが飛空魔法なのだが、聖も春樹も、なかなか上手いじゃない。

特に聖は、ちよつとだけ浮かぶという浮遊魔法を使えるというのもあり、頭の中でごっちゃになっってしまった。

仮に上手く魔力を変換できても、箒に跳ね飛ばされ壁に激突、というのを何度も繰り返す。循環が上手くいかないというなるそうさだ。

だがあまりにもできないので、訓練の前にヘイゼンに言われて外していた、循環を感知しやす

くする指輪を試しに嵌めてみた。すると、いとも簡単に浮くことができて、二人は愕然としてしまった。

そんなわけで、それからはより一層、魔力の循環訓練に励むようになった。

朝も昼も夜も、とにかく無意識でも循環できるようになるのを目標に、ひたすら修練する。

もちろん、箒を使った飛空魔法も同時進行だ。

何度も落ちて、数えきれないほど跳ね飛ばされて、それでもなんとか形になったのは、練習を始めてから十日が経過した頃だった。

「――師匠、どうでしょうか？」

ずっと浮いて、部屋の中を自在に移動しながら、聖はヘイゼンへと問う。

もう落ちることはいし、壁に向かって跳ね飛ばされることもない。

部屋の中を自在に飛び回る聖と春樹をじつと見ていたヘイゼンは、やがて満足げに頷いた。

「……いいだろう、今日で室内訓練は終わりだ」

「つてことは外か？」

すいっと、春樹がヘイゼンの前へと降り立つ。その動作に危なげな様子はない。

「そうだ、とはいっても演習場だな」

それでも外だということに、二人は喜んだ。

この部屋の中で飛べるようになった時も感動したが、やはり外で飛ぶのは別格だと思っている。

そうして連れてこられたのは、塔の後ろに面した巨大な演習場だった。

演習場を囲うようにして、上部と横に見えない壁があり、出入りできないようになっている。うっかりぶつかってもぼよんと跳ね返されるだけなので、危険はないとヘイゼンは説明した。

そんな演習場では、多くの練習生たちが空を飛んでいた。

「……人がいっぱい」

「……そうだな、飛んでるな」

「……師匠、この人ごみの中を飛ぶんですか？」

「そうだ。避ける訓練もできるからな」

どうやら、この人ごみの中でも危なげなく移動できるようになって初めて、試験を受けることができるらしい。

結構厳しいな、と二人は思ったが、空を自在に飛ぶにはやはりそれなりの技量が必要なのだと考え直す。

「よし、とりあえず飛んでみる」

ヘイゼンの言葉に促され、聖と春樹はゆっくりと浮かび上がる。

だが、どこまで上がったらいいかかわからず顔を見合わせていると、その様子に気づいたのか下から「できるだけ上まで行つて適当に飛んでこい」と声をかけられた。

それに頷き、二人は上を見る。

「えっと、みんなが飛んでる辺りまでって、ことだよね？」

「だな……かなり、上だな」

上を見て、下を見て、そしてまた上を見て、意を決したようにゆっくりと二人は上昇する。

見える景色が徐々に変わり、周囲を飛んでいる人々と同じ目線になったところで、聖と春樹は一度止まった。

「……僕、下見れない」

「まあ、結構高いもんな」

思わず聖の箒を握る手に力がこもる。

今までは部屋の中でしか飛んでいなかったもので、高度には限度があった。

けれど当然ながら外は違う。ヘイゼンは豆粒ほどのサイズになり、遠くの景色がよく見えた。

それをぼんやり眺めながら聖は口を開く。

「そういえば僕、元からあんまり高いところって得意じゃなかった」

「そういや……そうだったな。今更だけどな」

思わず苦笑した春樹の言う通り、本当に今更すぎた。

今までは必死だったので、あまり気にならなかったのだが、これからはそうはいかない。そもそも、移動に便利だからと思つて覚えたのに、実際使えないのでは意味がなかった。

聖は遠くなりそうな意識を気合で繋ぎとめる。



「……まあ、たぶんそのうち慣れる、とは思っただけだね」

「そうだな。とりあえずぐると回ってみるか」

「うん」

他の人の邪魔にならないよう、外周をぐるりと飛びながら周囲を観察する。

この演習場はデウニツツを囲む山脈に面しているのだが、その山脈の高さは想像以上だった。

空には結界が張ってあるものの、陸路で山脈を越えてくるならば入れるという話だ。

だが、この見るからに険しい山脈を実際にすると、どう考えても無理だと感じた。

そんなことをできる者は、おそらく勇者や魔王といった、とんでもない敬称が相応しい人なのだ

ろう。

なんてことを考えつつ飛んでいた二人は、徐々にだが慣れてきた。

少しずつ速度を上げ、危険がない範囲で人々の間を縫うように飛んでいく。

「ん、大丈夫そう」

「だな。そろそろ一度降りるか？」

「そうだね、と聖が振り向いた瞬間、こちらを見ていた春樹が驚きに目を見開いた。

「っ聖!!」

「え、うわっ!？」

聖は間一髪で、後ろから飛んできた人影を避ける。若干体勢を崩したものの、なんとか立て直し、

ほっと息をつく。

「大丈夫か!?」

「うん、なんとか。それよりいたい……」

突っ込んできた人物が飛び去った方を見ると、同じ年くらいの少年がこちらを向いて止まっていた。

睨むように見てくるその金茶色の瞳^{ひとまなこ}には、謝ろうとする意志は微塵も感じられず、むしろ敵意があることに聖は内心首を傾げる。

「……この程度は避けられるか」

「どういう意味だ。つか謝罪の一つもないのか?」

少年の言葉に、春樹は目を細め、怒りを隠して冷静に問う。しかし返ってきたのは嘲笑^{わらわらい}だった。

「はっ! なぜ僕が謝罪しなければならない。むしろ貴様らこそ、この僕の進行^{しんこう}を妨^{さまた}げたことを誠心誠意謝罪するべきだろう」

顎^{あご}を上げ、完璧にこちらを見下したように話す少年をしばし無言で眺めた聖は、何事もなかったかのように春樹に声をかけた。

「ん、そろそろ戻ろっか春樹」

「……そうだな。師匠に次はどうしたらいいのか聞かないとな」

聖の言葉に、一瞬目を瞬^{しんぱん}かせた春樹だが、察してすぐさま頷く。

よくわからない難癖^{なんくせ}をつけてくる、会話も通じないような相手とは話す価値もない。

そう態度で示して無視しようとした聖と春樹だが、当然少年がそれを良しとするわけがなかった。

「待て貴様ら! 何を勝手に行こうとしている! とうるか僕を無視するとはいい度胸だな!」

「……うるさいなあ」

聖はぼつりと呟いた。多少離れているとはいえ、ちらほらと周囲からの注目が集まり始めているのを気にしながら、仕方なく少年に向き直る。

「で、何の用?」

「……忠告だ。ヘイゼン教授の個人指導を今すぐ辞退しろ。あのお方はお前たち^{まへたち}如^{ごと}きには相応しくない」

聖はくると春樹に顔を向けた。

「春樹、そろそろお昼じゃない?」

「そうだな、降りたら食べるか」

「っだから僕を無視するなど言っている!! いいか!? お前たちがどんな手を使ったのかは知らないが、教授の指導を受けるのはこの僕こそが相応しいんだ! わかってるのか!?」

びしっと指を突きつけ言われた内容を、しばし脳内で反芻^{はんそう}し、聖は口を開く。

「……どんな手も何も、文句は冒険者ギルドに言ってくれない?」

「なんだと!?」

「あんな、俺たちは冒険者ギルドからヘイゼン師匠を紹介されてんだよ。俺たちの意思は関係ないわけ」

聖の言葉を補足するように春樹が言うが、少年の瞳は剣呑な光を帯びたままで、さらに理不尽なことを告げてくる。

「なぜ辞退しなかった!!」

「は？」

二人の声が重なった。

「この僕がヘイゼン教授を指名する予定だったのだ！ 察して辞退するのが当然だろう!!」

「……」

もはや二人の感想はただ一つ。なんだこいつ、それだけである。

「いや、お前の予定とか知らねえし」

「そもそも、どこのどちら様ですか？」

「なっ、この僕を知らないと言うのか!？」

春樹と聖の言葉にショックを受ける少年だが、二人はただ事実を口にする。

「知るわけないだろ」

「知らない」

「——っ!」

少年がなぜか絶句するのを見て、そんなに有名、もしくは偉い人物なのだろうか二人は考える。確かに彼が着ているローブは大勢の人が着ているものとは質が違って、とても上質なものに見える。

だが、二人にとってはなんの意味もないし、関係がないのは変わらなかった。

「いいかつ！ 僕はサンド……」

「パデル様!!」

そこに、第三者の声が挟まれた。

「……ち、なんだ？」

「今舌打ちしましたね!? なんだ、ではありません！ お一人で出歩いてはいけないとあれほどっ」

「やかましい」

「やかましい!?」

突然始まった言い合いを、聖と春樹はぼかんと見つめる。

第三の声の主——猛スピードでやって来た青年は、聖たちには目もくれず少年に向かってまくり立てっており、少年は心底面倒くさそうな態度で聞き流している。

「……よくわかんないけど、なに？」

「……さあ？ とりあえずどつかのお坊ちゃんとお目付け役ってどこか？」

「ああ、確かにそんな感じ」

この様子を見るに、どこかのお金持ちか貴族の息子なのだろう。となれば余計関わり合いたくない。

しかも今回に限っては、厄介事^{やっかいごと}が嫌とかではなく、純粹に面倒くさかった。

二人は目配せをして、気づかれぬようにそつと去ろうと試みる。

「待て！ どこに行く気だ！」

だが目ざとく気づかれた。

聖はもはや、感情を隠すことなくげやりに告げる。

「……迎えが来たみたいだから帰れば？」

「そうです！ 予定が詰まってるのですぐに帰りましょう！ しょう！ しょう！」

すかさず青年が便乗する。だが、それを聞き流した少年は忌々^{いまいま}しそうに聖たちを睨^{にら}む。

「パデル様！」

「だからやかましい！ こいつらが僕からヘイゼン教授を奪った奴らだ！ なんとかしろ！」

「へ？ この方たちが？」

こちらを見る青年の瞳がすつと細まるのを見て、聖は即座に告げた。

「あ、文句は冒険者ギルドをお願いします」

「事情はわかりました。この度は、とんだご迷惑を」

冒険者ギルド、という単語一つですべてを察した青年が深々と頭を下げる。

それに再び文句を言おうと口を開きかけた少年だが、青年が何かを小声で告げた瞬間、少年の口は閉じられた。聖たちを睨む眼差しは変わらないが何も言わない。

「……？」

二人はちよつと首を傾げるが、まあどうやらこれで解放されるようなので何よりだと思った。

その後、青年はもう一度謝罪の言葉を述べると、少年を連れて去っていった。

「結局、なんだったの？」

「さあ？」

ヘイゼンの指導を受けたいというのはわかったが、それなら直接言えばいいだけだ……もちろん

ヘイゼンが承諾するか否かは別だが。

そんなことを考えながら、二人はヘイゼンの前へと降りる。

「……戻ったか」

「はい。師匠、見えてましたよね？ あれってどこの誰ですか？」

上から見たヘイゼンは豆粒ほどだったので、普通に考えれば彼から聖たちの様子がはつきりと見えていはずはない。

けれど、無駄に面倒見のいいヘイゼンのことだから、何らかの方法で見ているはずだとの確信が、聖にはあった。

ヘイゼンはあつさりと頷く。

「ああ、あれか……知らないままの方がいいと思うが。聞きたいのか？」

心底面倒くさそうに言われ、返答に困った。春樹が微妙な表情で問い返す。

「えっと師匠。ほんとにどっかの貴族、とかか？」

「そんなものだ。まあ普通にしていればまず会うこともない……いや、お前たちは落ち人だったな」

「……なんですか？」

なぜか言い直したヘイゼンに、あんまり聞きたくないな、と思いつつも聖は先を促す。

「落ち人なら、うっかり会うこともなくはない」

「いや、うっかりってどんな理由ですか！　というかそれ別に落ち人関係ないですよね？」

そう言い返す聖に、ヘイゼンは心外そうに眉根を寄せた。

「何を言っている。落ち人とはそういう人種だろう」

「どんな人種!？」

思わず叫ぶ聖だが、ヘイゼンが知っている落ち人たちは、基本的に『うっかり』と『たまたま』でよくわからない交友関係を増やしていたのだからしょうがない。

それを聞いて、聖の口元が引きつった。

「で、どこの誰だか本当に聞きたいのか？」

「……知りたくないです」

「……今は、いいかな……」

春樹ですらも、そっと目を逸らして告げると、だろうなとヘイゼンは頷いた。

演習場に通うようになって数日、二人はその日も訓練のため箒に乗って空を飛んでいた。

「だいぶ慣れたよね。実技試験はいつになるのかな？」

「そろそろだろう？　昨日までに出されてた課題もクリアしてるし」

箒に他人を乗せてみたり、荷物が入った籠かごを吊つるしてみたりと、昨日までいろいろと課題が出されていたが、特に問題はなかった。重量が増える分、多少魔力の消費が増えるだけであまり変わりはない。

そして、今日は適当に飛んで来い、としか言われていなかったため、実技の試験も間近だろうと二人は考えていた。

「あ、聖。右じゃなくて左に旋回」

「ん？　あ、了解」

春樹に言われ、聖は一瞬ちらりと右に視線を向けるも、すぐさま左へと進路を変える。

「師匠に直談判じくだんぱんすればいいのにね」

「だよな！　まあ、断られた後っていう可能性もあるけどな」

「あー、否定できない」

聖は思わず苦笑する。

よくわからない難癖をつけてきた少年の姿は、その後も何度も見かけていた。

だが、お付きの青年が傍にびつたりと張り付いており、こちらに近寄る気配がないため、見かけたらすぐさま離れている。

とにかく面倒な感じしかないので、どれだけすごい目つきで睨まれようが無視だ。

(ま、それもたぶんあと少しの辛抱だけだね)

聖は内心で呟いて意識を切り替える。

きつともうすぐ実技の試験を受けるだろうし、合格さえすればこの場所に来ることもない。

「害はないし放置の一択だよね」

「ああ、スルーが基本だよな」

そう、それが最善であることを二人は知っている。

もちろん、あからさまに避けられ無視された少年の機嫌が目に見えてどんどん悪くなっていくことなど、気にすることもない。

さらに、お付きの青年が若干お疲れモードになっている気がしなくもないのも、二人には関係ない。ないったら、ない。

聖と春樹には、全くの無関係であった。

なので今日も何一つ気にすることなく一通り飛んだ後、何か指示があるかもしれないと、一度へ

イゼンのもとへと戻る。

すると彼の隣には、にこにこ笑う老齢の女性がいた。

「戻りました、師匠、と……？」

「……誰だ？」

聖と春樹が揃ってきよんとすると、ヘイゼンが当たり前のように告げた。

「ああ、試験官だ」

「は？」

「ふふふ、初めまして？ メアリちゃんと呼んでね」

「……は？」

メアリと名乗った老女にぽかんと口を開けてから、二人がヘイゼンに視線を移すと、深くため息をついている。

「遊ぶな。それで、結果は？」

「ふふ、子供って可愛いわねえ。もちろん、合格よ」

「まあ、当然だな」

「相変わらずねえ。ま、文句なしよ」

よくわからない会話の後、メアリと名乗った老女は「ふふ、頑張りなさい」と最初から最後まで謎の微笑を残して去っていく。

それを、聖も春樹も何も言えずに見送った。

「えっと、師匠？ 試験官、てことは実技試験の日にちが決まったってことですか？」

「ていうか、今のが試験官かよ……」

春樹の口元がやや引きつっているのも無理はない。何やらやり辛そうな気がするのには聖も同じである。

だが、それに対するヘイゼンの返答は、よくわからないものだった。

「ああ、実技試験は合格した」

「……は？」

「……へ？」

「実技試験は合格した、と言ったんだ」

聞こえなかったのか？ と言いたげに淡々と告げるヘイゼンだが、聖と春樹には言葉の意味が理解できない。

「あの、師匠？」

「なんだ」

「えっと、それは僕と春樹の実技試験の話ですよね？」

「当たり前だろう、他に誰がいる」

飄々^{ひょうたうたう}と答えるヘイゼンに、思わず春樹が突っ込んだ。

「いやいやいや!? 実技試験なんて受けた覚えもないのになんで受かってんだよ!？」

叫んだ春樹に、全力で頷く聖。

そろそろ試験かなあ、とは確かに思っていたが、終わりどころか始まりも告げられた覚えはない。

二人が思わず詰め寄るも、ヘイゼンの表情は何一つぶれない。

「なんだ、そんなことか。実技の試験は基本的に抜き打ちだ」

担当指導官が判断し、試験官を連れてきて訓練の様子を見せるのが試験となり、それで合否が決まる。もちろん不合格の場合もあるが、抜き打ちなので試験があったことすら合格するまで本人が知ることはない。もっとも、担当指導官が大丈夫だろう、と判断してから試験をするので基本的には合格するのだが。

そんなヘイゼンの説明に、聖はどうしたらいいのかわからず、微妙な表情を浮かべる。

「なんだろう……嬉しいんだけど消化不良」

「あー、まあ、気持ちには、わかる」

春樹も同じような表情で頷く。

なにせそろそろ試験だ、と気合を入れていたのに、知らないところで始まって終わっていた。そして言い渡されたのは合格の二文字。肩すかし感が半端なく、素直に喜べない。

だが、ヘイゼンは二人の気持ちの整理など待ってはくれない。

「帯へ印を施す^{はらふ}のは明日になる。詳しくはグレイスに聞け。終わったら一度、僕のところ顔を出

すように」

「あ、わかりました」

「了解」

そしてそのままあっさり解散となった。

「あはは、それで微妙な顔してたのね」

試験を終えたばかりの聖たちから話を聞いて、グレイスは笑って頷いた。

冒険者ギルドにある、ギルドマスターの部屋。

例によって炭酸水の売買のために通されたのだが、ギルドマスターが少々遅れるとのことで、試験のことを話していたのだった。

「外から来る人は大抵そうなのよね……この住民は何となくの噂で聞くからわかってるんだけど」

もちろん、大つびらに言うことはないし、もし聞かれたとしても答えることもない。だが、暗黙の了解として皆知っているのだとグレイスは言う。

「……へー」

聖と春樹も誰かに言う気はない。むしろ抜き打ちだなんて知ったら毎日が緊張の連続となり、とても可哀相だろうと思ってしまう。

「それにしても本当に約一月で合格まで行くなんて、さすが落ち人よね」

感心したように言うグレイスだが、そもそも一か月と言いついたのは、聖たちではなく彼女だ。

本当にできると思わなかったと言わんばかりの口調に、この一か月の無茶ぶりを思い出した二人は、若干半眼になる。

短い期間で習得できたのはありがたいが、もう少しゆっくりでもよかったと思わないでもなかった。

「いいじゃない、終わりよければすべてよしって言うし！ あ、来たわよ」

誤魔化すように笑って言ったグレイスにつられて、開かれるドアに視線を向ける。

そして現れたギルドマスターは、思った以上に小柄で……毛の塊だった。

「すまぬな、遅れた」

聞こえた声は重低音。

見た目とのギャップがすごいなど、ぼんやりと思うも問題はそこではないと、聖も春樹も思い直す。それよりもっと気になるものがあつた。

二人は説明を求めて無言でグレイスを見る。

「……？」

視線の意味がわからず首を傾げるグレイスだったが、そう言えばと遅れて気がついた。

「説明してなかったわね。えっと、毛長族っていう種族なの」

「……け？」

「……なが？」

「そう。えつとね……」

毛長族は、小人族のように小柄で、髪の毛の成長速度が尋常じゃない種族だそうだ。

髪の毛には常に薄く魔力が流れており、基本的にはそれで体全体を覆っている。よって、見た目は白い毛の塊というか毛玉。目や口どころか、前と後ろの判別もつかない……とのこと。

（……毛玉……）

（……紛れもない毛玉、だな……）

二人がまじまじと見つめていると、そんなよくわからない毛玉から声が上がります。

「ふむ、種族の説明はそれでいいかの？ わしがこのギルドマスターをしとるラジハルじゃ。おじいちゃんと呼んでくれていいぞ？」

「……」

なにやら少し前に、似たようなやり取りがあったような気がするのには気のせいだろうか。

「……ギルマス。話を先に進めてください」

「なんじゃグレイス。受付嬢たる者、もう少し愛想^{あいそ}が必要じゃよ？」

「安心してください、ギルマスに振る舞う愛想がないだけです」

「ふむ、ならよいか」

「はい」

いいんだ。

そんな聖と春樹^{はるき}の心の突っ込みを知ることなく、グレイスはこちらを見てにこりと笑みを浮かべる。

「それで用件はさっき話した通りなんだけど、まずギルマスにお願いできる？」

聖は頷くと、取り出したコップに炭酸水を注ぎ、それを毛玉、ではなくラジハルの前へと置く。すると――

「うわっ!？」

「ちよっ、毛!？」

ラジハルの体を覆っていた毛がによりと伸びてコップに巻き付き、そのまま毛玉の中へと引き込んだ。

はつきり言ってもはやホラーな現象。というか動くということが驚きだったが、すぐにこれは当たり前前の光景らしいとわかった。

グレイスが呆れたように「だから面倒くさがらないでくださいといつもっ」と、なにやら文句を言っている。

「……めんどろ、なんだ」

「……まあ、便利と言えば便利、か？」

何ともコメントのし辛い光景を目の当たりにしつつ、二人がラジハルを見ていると、その毛玉の中から奇怪な叫びが聞こえた。

「うひょっ!？」

「「……うひょっ」」

「だから言ったじゃないですか、びっくりしますよって」

ラジハルはちらりとグレイスの方を向いたのか毛がさらりと揺れ、そしてしばし沈黙。

ごくごく、と微かに音がすることから、口に合わなかったわけではないらしいと安堵しつつ、聖たちはラジハルが飲み終わるのを待つ。

そして、再び毛玉からによりりと毛が伸びて、コップが机の上へと戻された。

「どうします？ 三くらいですか？」

「ふむ、五でもよいかの」

「わかりました！」

ラジハルの言葉に、元気よく答えたグレイスは、持っていた袋からもはや見慣れた樽をぽんぽん出していく。そして、お願いねと言わんばかりにイイ笑顔を向けてきた。

「……じゃあ春樹、入れてくるね」

「おう、頑張れ」

ちよつとだけため息をつくも、聖はすべての樽へと炭酸水を入れ、今回の販売も無事終了したの

だった。

そして翌日。

聖と春樹は箒に印を押してもらうために、グレイスの案内で塔の奥の部屋へと向かう。

何をするのだろうと少し身構えていた二人だったが、拍子抜けするほどあっさりと終了した。

印を押す道具はどこからどう見ても、見慣れたインク内蔵タイプのハンコだった。

だが、聖も春樹も、まあ便利だよねと深くは追及しない。

なぜなら、どう考えても作ったのが落ち人であることは明白だからだ。

その後は、そのさらに奥にある部屋へと通される。そこで待っていたグレイスに声をかけようとした二人だが、目に飛び込んできた光景に目を見開いた。

「あ……これ？」

「……なるほど」

そこは白一色に染められた不思議な空間。そして正面にある壁には、金色の文字が書かれていた——日本語で。

それは紛れもなくこの国を作ったとされる落ち人、松木楓まつき かでによる、親友へのメッセージ。

箒に印を押した後は、必ずこの部屋へ通される決まりらしいが、それはきつと、グレイスに言葉を届けるためだったのだろうと、よくわかる。

なにせメッセージの最後に『もし、これを読めてしまつて意味がわからなかった人は忘れること!』という言葉があるくらいだ。それくらい、当事者にしかわからない内容だった。

「……こんな大々的にメッセージを書くなんて、気づかないわけにはいかないじゃない?」

グレイスがどこか呆れたように、でも楽しげに言う。

「確かに。ていうかこれ、ものすごい職権濫用だよな」

「すごいよね。いくらこっちの人が読めないだろうと思つても」

「ええ、今更消せないし。ものすごく素晴らしいことが書かれてるって信じてる人たちに内容を伝えるなんて無理よ」

これは誰にも言えない。超私的なメッセージだ。

今までここに來た落ち人たちも同じ気持ちだったのだろう、一般に伝えられているのは『大事な人へのメッセージ』くらいだったようだ。聖と春樹もきつと、もし聞かれたら似たようなことを答えるだろうと思つた。

「あ、それとこの後なんだけど。少しでいいからちよつと時間貰える? 話したいことがあるの」

「いいよ。じゃあ一度戻つて……」

頷きながら聖が振り向いたその瞬間、何の前触れもなく突然、地面が光り輝いた。

「は?」

「え?」

しかも、なぜか聖と春樹の足元限定で。

何事かと思うも咄嗟のことに体は動かず、眩しさに思わず目を閉じると、どこかに引つ張られるような感覚が二人を襲う。

「え? ちよつ、聖!? 春樹!」

そして、そんなグレイスの声を最後に、聖と春樹は忽然とその姿を消した。